
歯車付き

uzmz

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歯車付き

【Nコード】

N5802Z

【作者名】

uzmz

【あらすじ】

車谷ハヅキには、双子の姉、ナツキがいる。二人は全く同じ容姿をしているが、誰も間違えたりはしない。ハヅキには他の誰にも付いていない物が突き刺さっているから。

以前「作家でござん！」さんの鍛錬場にてあがった企画に乗り遅れたもの。

「遅刻」「バッテリー」「修理」の三語を使って千文字以内の小説を書け、という条件でしたが、何しろ参加し損ねたので文字制限

は気にしていません。

遅刻

「申し訳ありません。出席番号12番の車谷ナツキ、遅刻しました」

教室に、何人かの忍び笑いが溢れる。

教師は苦笑し、少女の胸から生えたぜんまいをはたいた。それはよほど深く突き刺さっているのか、ぐらつくことは無い。

「わかりやすい嘘を言わないの、ハヅキさん。あなたのお姉さんはちゃんと時間通りに登校していました。……ほんと、あなたにぜんまいが生えていて良かったわ。これが無ければ騙されていたかも」

言つて、出席簿に鉛色のボールペンを走らせる。

少女は爪先立ちになり、出席簿を覗き込む。勢い余つて胸元のぜんまいを教壇にぶつけてしまい、鈍い音が響いた。くすくす笑いが少し大きくなる。

13番、車谷ハヅキ。遅刻を表す印は、何度見直してみても彼女の名前の横に存在している。

自分の遅刻を姉に肩代わりさせてやろう作戦、失敗。ハヅキは苦笑いを浮かべながら自分の席まで歩き、座った。ぜんまいをぶつけないように角度に気を配ったため、大きな音は鳴らない。

窓際の席だ。春の陽射しが薄いカーテン越しに端の席を一行ほど照らしている。それと同じように、照らされた埃がきらきらと踊っていた。この高校はあまり掃除に力を入れていない。

隣席の少女が、呆れ顔で眼鏡を外した。その拍子に、肩口で切り揃えられた頭髮がさらりと揺れる。

「もう、ハヅキの馬鹿。なんであんなこと言ったの。バレるに決まってるでしょ。あんた、自分に何が生えてるのか忘れた？ それと

も、ぜんまいと一緒に頭のネジまで緩んでたとか？」

その少女は、ハヅキとほとんど同じような見た目をしていた。短い髪、血色のいい肌、眼鏡で丁度隠れる位置にあるほくろの位置。その眼鏡まで同じものを使用しているのだから、念が入っている。学校指定の制服に身を包んでいることもあり、彼女たちを見た者は、鏡像でも見ているかのような錯覚に陥るだろう。

そうではないと判断できる唯一の点は、胸から生えたぜんまいの有無ぐらいだろうか。先に座っていた少女の胸には、何も刺さっていない。

「だって、遅刻するのは私ばかりじゃん。たまにはナツキも出席簿にペケマークをつけないと、バランス悪いよう。あーあ、これさえ無ければなあ」

ハヅキは唇を尖らせると、胸部から生えたぜんまいをいじくった。真鍮色をした大きなぜんまいだ。大人の頭ほどはあるだろうか。

点状に緑がかったサビが、作られてから長い時間が経過していることを示している。胸の中心に突き刺さってはいるが、幸いなことに制服は羽織るタイプのブレザーなので、ボタンの合間からぜんまいを出すことができている。これがチャック式のセーラー服だったら、途中でぜんまいに引っ掛かってしまっただけで着ることができなかっただろう。

どれほど深くまで根を伸ばしているのだろうか。ネジの太さはハヅキの手首ほどもある。ボタンの隙間からちらりと覗く胸元からは、赤茶けた包帯がさらしの様に巻かれているのが伺えた。血が周囲に足れないために、そして刺激の強い根元がすっかり見えないようにするためにという本人なりの気遣いだ。

「悪いのはバランスじゃなくて、家を出る時間でしょう。大体何よ、

その眼鏡。ハヅキは視力悪くないじゃない。まさか、私に濡れ衣を着せるために用意したの？ そんな努力をする暇があったらもっと早く準備をすませなさい。似合ってないわ」

ナツキは畳み掛けるように言い放ち、眼鏡を掛け直して前を向いた。ほくろの隠れた横顔をしばらく恨めしげに見つめてみたが、黒板を見据える視線はチラともぶれない。話を続けるつもりは毛頭無いらしい。

「似合わないって……全く同じ顔をしているくせに」

ぜんまい仕掛けの少女は恨めしげにつぶやき、双子の姉とは対照的に眼鏡をはずした。

薄いレンズ越しに見ていた時よりも視界が明瞭になる。と言つて、その明瞭な視界に映るものは、特筆すべき事の無い教室なのだが。小さくため息をつく、義姉に倣って顔を前に向ける。視線の先では、教団に立つ教師がノートを見ながら連絡事項を伝えていた。

「今日の健康診断ですが、私たちのクラスは三時間目の途中ぐらいになります。二つ前のクラスが終わったら連絡が来るので、他クラスの授業を妨げないよう、静かに更衣室に移動してください。貴重品は各自持ち歩くこと。聴診器を当てるので、診察の前に女子はブラジャーを外します」

右から左へと聞き流しながら、ハヅキは胸元に両手をやり、二、三度グイとぜんまいを巻く。心臓をも貫いているであろうネジが、わずかに上着を巻き込む。この行為は習慣的に行われているのか、よく見ると制服にはぜんまいを中心とした放射線状の皺がよっていた。紺のブレザーが、わずかにその色を濃くした。

手を離す。固く締められたぜんまいがゆっくりと戻り始める。動

力の伝達を受けた心臓が強く鼓動し、ハツキの体に活力が湧く。

少女は満足気にうなずくと、迷いの無い動きで机につつぷし、居眠りを始めた。ぜんまいをぶつけないように角度に気を配ったため、今度も大きな音は鳴らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5802z/>

歯車付き

2011年12月19日13時46分発行